

いま、社会の「幸せ」の概念とは

市長：山崎さんの協力も得て現在策定している高浜市の「しあわせづくり計画」では、市民の方たちのなかにある、まちづくりへの参加のしかたや想い、地域での「こうしたい」や「できる」を表していきたいと思っています。現在、高浜市では5つの小学校区すべてに「まちづくり協議会」があり、市民主体で地域全体を巻き込んだ活動が注目されて他の自治体から視察が来るほどになっています。本当に皆さんいきいきと活躍されていますが、ただ、まちづくりはずっと続くものですし、それを支える今後のためには若い世代の参加が必須です。なおかつ職員はもっと力をつけなくてはならない。私は「幸せ」はみずから動くことで生まれるものだと思うので、それをもって計画づくりにあたっていききたいのですが、今社会

的に言われている「幸せ」、山崎さんの考える「幸せ」とはどのような姿でしょうか？

山崎さん：今の日本で語られている「幸せ」の概念は、1970年代ころに話題になった「真の豊かさとは何か？」という問いかけから始まったと思います。私には中学時代に出会った本『豊かさとは何か』（暉峻淑子著1989年）が「豊かさ」を考えるスタートでした。

1990年代初頭ころまでは、多くの人がイメージする「豊かさ」とはお金やモノで測れるようなものでした。しかし、プータン国王が就任時に語ったGNH（国民総幸福量）への共鳴が欧米・日本に広がり、「豊かさ」論は「幸せ」論に変化したのです。また、オランダの大学が経済学の見地から「あなたは幸せですか？」という問いに「Yes/No」で答えるシンプルな調査で地域特性に切り込む研究を始めました。例えば、GNPが高いといわれる日本に「幸せ」と感

じる人がさほど多くなく、その真逆の国もある。これが雑誌などで話題になりました。このような流れを経て、日本でも「幸せ」「豊かさ」はお金やモノだけでは測れないということが見えてきたんだと思います。

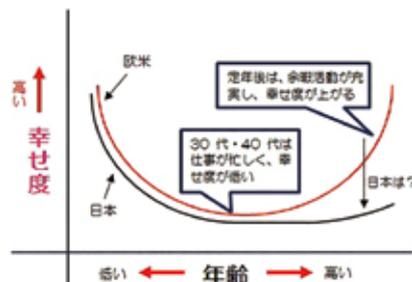
市長：平成25年に荒川区をはじめ多くの自治体が賛同して「幸せリーグ」(※1)が設立されました。高浜市も参加していますが、おっしゃったように測りにくいにもかかわらず、自治体の間では「行政サービスと住民の幸福実感」という視点が斬新で注目されています。こんなふうに「幸せ」という言葉がこれほど受け入れられたのはなぜなのでしょう？

山崎さん：おそらく、拍車をかけているのは高齢化だと思っています。

〈幸せ曲線〉(※2)が、ヨーロッパのようなU字型ではなく、日本はL字型になっていることが問題視されている。ヨーロッパだと30代・40代は歯を食いしばってがんばって疲れていても、リタイア後はハッピーになるんです。日本はL字型で、高齢になっても幸せ度は低いままという図になってしまっている。これでは未来がない感じがするし、幸せづくりという点では、やはりU字型をめざすことが大切であり、そこに必要な要因は絶対にお金とモノではないはずだということです。じゃあその要因とは何かを考えていかなきゃい



(上から) 高浜南部、吉浜、翼、高取、高浜まちづくり協議会の活動



(※1) 幸せリーグ
住民の幸福実感向上をめざす基礎自治体連合。荒川区の公式ホームページから検索可

(※2) 幸せ曲線